

地獄谷 — 「南雲中将自害の地」

サイパン戦最後の「バンザイ突撃」が行なわれた戦場



地獄谷

マタンシャから内陸方面へ約1キロにわたる峡谷につけられた名称。 1944年6月15日サイパンに上陸した米軍は、26日にはタポチョ山も占領し、さらに北部へ進行を続けた。6月29日、南雲忠一海軍中将率いる日本軍合同司令部は、タポチョ山からこの地獄谷に移動した。

サイパン島は 地殻変動によって隆起してできた島で、自然洞窟が多く存在する。日本軍司令部は、やや小高いところにある自然洞窟の1つを指揮所とし、最後の迎撃戦闘を計画した。しかし米軍は、南側と北側からこの地獄谷をはさみうちにした。すでに大本営本部との連絡も困難になっていた日本軍は、兵器・弾薬も消費しきって もはや重火器は一門一挺も残っていなかった状態で、可能な攻撃は「肉弾攻撃」または「万歳突撃」のみだった。ここで戦った日本兵1500名～3000名は、ほぼ全滅する。

7月6日、南雲中将は、北部マリアナ地区集団司令官齊藤中将、および第三十一軍参謀長井桁少将とともに、洞穴内で自決した。これと前後して辻村少将、辻北部支庁長なども相次いで自決した。この洞窟の入り口には、分厚い鉄の板が一枚だけ立て掛けてあった。10発ほどの米軍の弾痕が残っているが、何発かは板を貫通しており、当時の激戦をうかがい知る事が出来る。

南雲中将らが自害した夜、日本軍は 将校・下士官なしで「肉弾攻撃（玉砕）」を開始。米軍からは「バンザイ突撃」と呼ばれ恐れられた。しかし7月9日、米軍はサイパン全島の占領を宣言し、ここにサイパン戦は終了した。

南雲中将とは

南雲忠一中将とは、日本海軍司令官として、太平洋戦争の発端となったパールハーバー攻撃を成功に導いた人物。 ミッドウェイ海戦、南太平洋海戦などに参加した後、1944年春 中部太平洋方面艦隊司令官として、サイパン島に着任する。日本軍の敗北が現実になった際、「生きて虜囚の辱を受ける事なかれ（敵の捕虜となって生き残るよりは、名誉の死を選べ）」という訓示を、部下達のみならず、サイパンの住民達に指示した。元来戦闘に無関係である住民達の保護をおごなりにし、彼らをスーサイドクなどでの自害に追い詰めた責任者、という批判もある。 享年 57 歳。

南雲中将最後の訓示

サイパン全島の皇軍将兵に告ぐ、米鬼進攻を企画してより茲に二旬余、在島の皇軍陸 海軍の将兵及び軍属は、克く協力一致善戦敢闘随所に皇軍の面目を發揮し、負託の任を完遂せしことを期せり、然るに天の時を得ず、地の利を占むる能はず、人の和を以って今日に及び、今や戦ふに資材なく、攻むるに砲煩悉く破壊し、戦友相次いで斃る、無念、七生報国を誓ふに、而も敵の暴虐なる進攻依然たり、サイパンの一角を占有すと雖も、徒に熾烈なる砲爆撃下に散華するに過ぎず、今や、止まるも死、進むも死、死生命あり、須く其の時を得て、帝国男児の真骨頂を發揮するを要す、余は残留諸子と共に、断乎 進んで米鬼に一撃を加へ、太平洋の防波堤となりてサイパン島に骨を埋めんとす。戦陣訓に曰く『生きて虜囚の辱を受けず』勇躍全力を尽して従容として悠久の大義に生きるを悦びとすべし。



「自決の洞窟」に向かう



南雲中将自害の洞窟



陶器の破片のようなものを見つけた。遺品か、慰霊団が供養につかったものの一部か。